RISSHO UNIVERSITY
立正大学
FD News Letter
Vol.35
November, 2026

CONTENTS

1　●令和８（2026）年度立正大学 FD 活動について
2～6 ●令和７（2025）年度ベスト・クラス賞 受賞科目紹介
7　●令和７（2025）年度「授業アンケート」・「大学院学修成果・満足度調査」実施概要

令和８（2026）年度立正大学 FD 活動について

立正大学長　北村　行伸

本学ではこれまで、「教育の質保証に向けた取り組みの実質化」や「多様な教育手法を活用した授業の展開」などを年間テーマとして掲げ、令和7年度には「教育研究の『質』の更なる高度化」をテーマに設定しました。この流れを継承し、本年度は「教育研究の『質』の更なる高度化②―AI の時代における大学教育の展開―」を FD の年間テーマといたしました。

既に皆様が実感されている通り、生成 AI の急速な発展は、個々の教育・研究活動に変化をもたらすだけでなく、大学における知識の創造・継承や人材育成の在り方そのものに再検討を迫っています。大学教育には、知識を習得することに加え、適切な問いを立て、情報の正確性や妥当性を吟味し、他者との対話を通じて新たな価値を生み出す力を育成することが、これまで以上に求められています。

こうした変化に対応するためには、生成 AI の利用に関する制度やルールを整えるだけでは十分ではありません。教職員一人ひとりが、その特性と限界を理解し、教育・研究にどのような可能性と課題をもたらすのかについて認識を深める必要があります。そのうえで、それぞれの授業や研究の目的に照らし、生成 AI をどのように活用し、学生にどのような力を身につけさせるのかを考えていくことが重要です。本年度の FD を通じて、教職員の皆様に生成 AI への理解を深めていただくとともに、自らの教育・研究の在り方を改めて考える機会としていただきたいと思います。

また本学では、このようなテーマを本年度の FD 活動の主軸としつつ、大学教育を取り巻く社会的・制度的な動向を踏まえ、教育研究の質の向上につながる FD 活動を幅広く展開していきます。9月28日に実施した集中 FD では、文部科学省の教育・学習の質向上に向けた新たな評価の在り方ワーキンググループによる「議論のまとめ」を踏まえ、今後の大学教育の質保証に関わる「新たな評価」の基本的な考え方と枠組みについて理解を深めました。



この「議論のまとめ」は、公表以来、大学関係者の間で大きな関心と議論を呼んでいます。「新たな評価」では、教育の実施状況を形式的に確認するだけでなく、学生が何を学び、どのような力を身につけたのかを把握し、その結果を教育の改善につなげることが、これまで以上に重視されています。今後、各学部・研究科において、自らの教育の特色や課題を改めて確認するとともに、教育課程や学修成果の点検・評価を具体的な改善に結びつけられるよう、全学的な内部質保証のさらなる充実を図っていくことが重要です。

教育研究の質の高度化は、特定の組織や一部の教職員のみで実現できるものではありません。大学全体で課題を共有するとともに、それぞれの教育・研究活動において改善を積み重ねていくことが不可欠です。本学では昨年度から、すべての専任教員に FD 研修会への参加をお願いし、受講率100％を目標としてきました。その結果、昨年度に引き続き、本年度も受講率100％を達成することができました。これは、教育の質の向上に対する教員の皆様の高い意識とご協力の成果であると考えています。

今後も、より良い教育・研究の実現に向けて、皆様とともに取り組みを進めてまいります。引き続き、ご理解とご協力をお願いいたします。

令和7（2025）年度ベスト・クラス賞　受賞科目紹介
教員インタビュー

〈概要〉
2025年度授業アンケート結果より、ベスト・クラス賞を受賞した4名の先生に、授業設計のポイントや工夫をお伺いしました。





神林 哲平 先生
（社会福祉学部
子ども教育福祉学科講師）

受賞科目名：
「保育内容の理解と方法
【言語表現】Ｂ」（対面）

――授業の目的や概要、授業の流れについてお聞かせください。

この授業では、保育や教育現場での実態に応じて柔軟に「使える」教材を紹介しながら、その演習を通して実践的な技能や判断力の素地を養うことを目的としています。概要としては、子どもと保育者・教育者双方の言語表現に着目して、その重要性や意義を示すとともに、絵本・紙芝居・パネルシアター・ペープサート・人形劇・ストーリーテリングといった具体的な「児童文化財（＝子どもの健全な発達に役立つ文化的所産）」に触れます。それぞれの児童文化財について2回セットで構成し、1回目は私の実演も含めて歴史的な成り立ちやジャンル、特徴について講義を中心に伝えます。2回目は、学生が実際に絵人形などを作成して実演し、ふり返りをするという流れです。

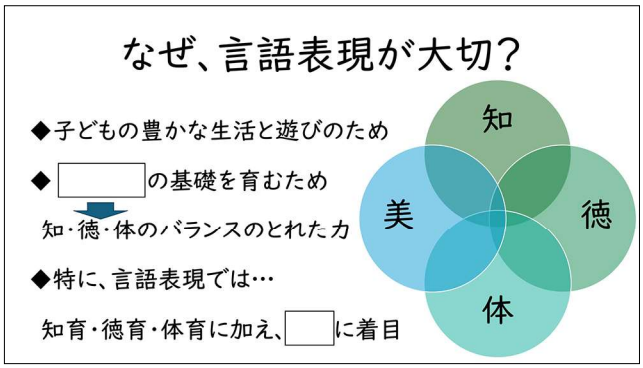
――授業構成のポイントや工夫（学生からの評価が特に高かったポイントや学生のコメントのご紹介、学生の学修意欲を向上させる取り組み等）についてお聞かせください。

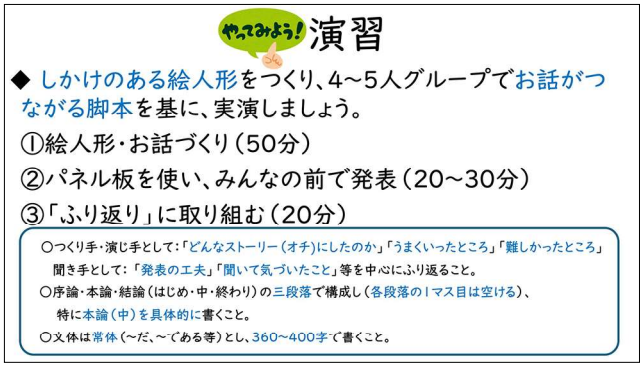
授業構成のポイントとしては、「習得→活用→ふり返り」を組み込みつつ、ラーニング・ピラミッドを意識してアウトプットを取り入れていることが挙げられます。

「習得」では3つのトピックを取り上げ、ブランクの入った資料に書き込みをするとともに、トピックの節目ごとに学んだことを「パラフレーズ（＝自分の言葉で言い換える）」する時間を設けています。「パラフレーズでまとめることによって自分で考える力が身についた」という学生のコメントのように、論理的思考を伸ばす活動の一つとして位置付けています。

「活用」では、グループでの実演を通して体感的な学びにつなげます。近年は幼児期の「記号接地問題（言葉がどのように実際の世界の意味と結びつくのか）」が取り上げられることがありますが、大学生も同様だと







思います。「学んだ内容を実践できる授業によって、身につく度合いが高いと感じた」という学生のコメントのように、実際にやってみることで、頭だけで理解するのではなく文字通り「身に付く」のだと言えるでしょう。個々人で製作した絵人形をどのように組み合わせて脚本をつくるか、グループでの腕の見せ所です。

「ふり返り」では、自分のグループの実演でのよかったところや工夫、他のグループの実演を見聞きしての気づきといった点を総合的に省察します。体感的な学びだけでも十分な価値はありますが、それを言語化することで学びを深める意図があります。そして、その力を伸ばすことで、学生が保育・教育現場に出たときに「書ける保育者・先生」として活躍できるような長期的な視点も含んでいます。

――授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

現場で活用できる教材の引き出しをできるだけ増やしてほしいという願いから、多様な児童文化財を取り上げています。その分、絵人形などの製作にゆとりをもった時間を十分に確保できていないことが課題として挙げられます。「作品を作って発表までの時間があまりなかったので難しかった」というコメントのように、特に作品をつくりこみたい学生にとっては申し訳ない気持ちです。改善策としては、グループでの脚本づくりを製作・実演の前の授業に組み込み、製作時間を少しでも確保できるように模索していきたいと思います。

――ありがとうございました。



木村 了子 先生
（非常勤講師）

受賞科目名：
「キャリア開発基礎講座ⅢＤ」
（対面）

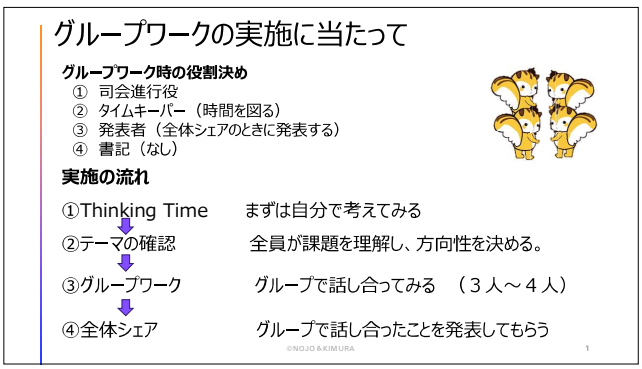
――授業の目的や概要、授業の流れについてお聞かせください。

この科目では自己分析や業界・企業研究を通して、変化の激しい産業構造の中で求められる力を理解し、具体的な業種や職種を意識した職業観・勤労観を育てることを目的としています。

また、実務家を外部講師として招き、業界や企業の最新動向を学ぶ機会を設けることで、学生が自らの適性や関心を見つめ直し、進路選択に向けた判断材料を得られるようにしました。

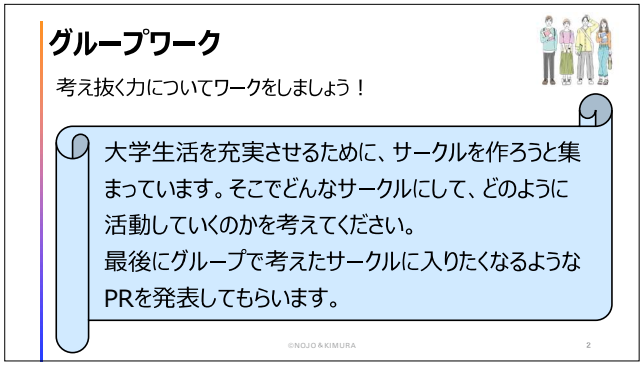
最終的には、変化する産業構造や働き方の中で単なる職業観にとどまらず、社会的・職業的に自立するための基盤となる能力や態度の育成を目指しています。

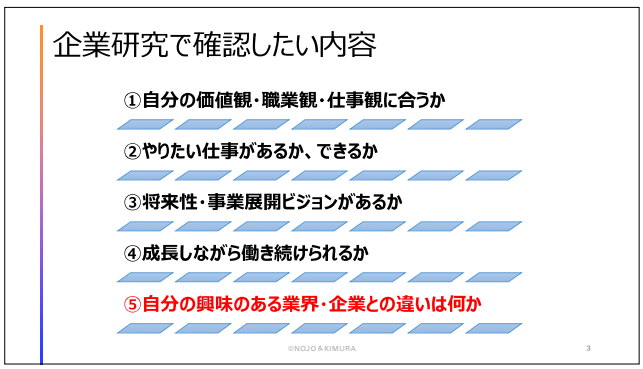
これらの目的に沿って、授業は「自分を知る」「社会を知る」「仕事を知る」という三つの観点から構成し実施しました。



――授業構成のポイントや工夫（学生からの評価が特に高かったポイントや学生のコメントのご紹介、学生の学修意欲を向上させる取り組み等）についてお聞かせください。

この授業では学生の主体的な学びと相互理解の促進を重視し、毎回の授業冒頭で前回のリアクションペーパーを振り返り、学生の意見共有と要点整理を行いました。そのうえで、くじ引きによって編成された3～4名のグループによる自己紹介ワークや講義・グループワークを組み合わせ、協働的に学ぶ構成としました。こうした運営により、学生は多様な価値観に触れながら意見交換を行い、課題に向き合う中で思考や表現の幅を広げ、他者と調整しながら進める経験を重ねていきました。また、毎回座席をランダムにすることで、固定的な人間関係に依存しない学習環境を整え、初対



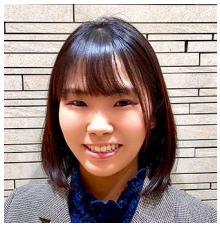


面の相手とも対話する経験を積めるよう工夫しました。さらに、実務家を外部講師として招聘し、各業界の実情や最新動向に触れる機会を提供することで、学生が自らの適性や関心を見つめ直す契機となる学びを促しました、学生からは、「毎回席がくじ引きで行われ、知らない人とコミュニケーションをとる練習ができる点です」「グループワークを行うことでそれぞれの意見を取り入れ、整理するといった力が身につく」「実際に企業の方が来てくれて説明してくれるのでより深く学べることが出来る」といった評価が寄せられ、特にグループワークの設計や外部講師の活用が高く評価されたのではないかと考えています。

――授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

今後の展望としては、キャリア教育を担当する立場から学生が多様な価値観に触れながら自分の進路を考える機会をさらに充実させていきたいと考えています。特に互いの意見を聞き合い思考を深めるプロセスはキャリア形成において重要であるため、グループワークは今後も継続して重視していきます。一方でコミュニケーションが苦手な学生にも参加しやすいよう、負担を軽減する工夫を引き続き検討していきます。また社会や産業の変化に関する最新情報を取り入れ、学生が視野を広げながら自分の進路と結びつけて考えられる授業展開を目指します。

――ありがとうございました。



福井 晴那 先生
（心理学部講師）

受賞科目名：
「心理学実験ⅡB（臨）」（対面）

――授業の目的や概要、授業の流れについてお聞かせください。

この授業は、心理学を学ぶのに欠かせない「実験」を実践的に学ぶ授業です。心理学では調査や実験によって得られたデータを統計的に分析して現象を科学的に読み解くことを重視します。この授業ではそうした研究の姿勢と手法を、実際に手を動かしながら身につけていきます。

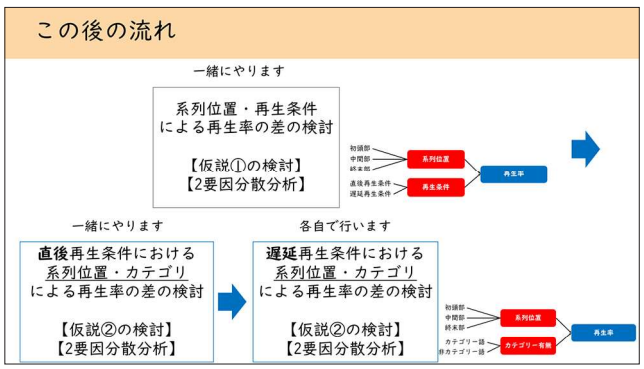
授業では心理学の代表的な実験テーマを3つ取り上げて、それぞれ4回程度の授業を1クールとして進めます。1クールの中では実験計画（テーマの背景説明や関連論文の講読）→実験実施（グループでの実験・データ収集）→結果分析（統計ソフトを用いた分析）→レポート作成という一連の流れを体験して研究の全体像を理解できるようにしています。

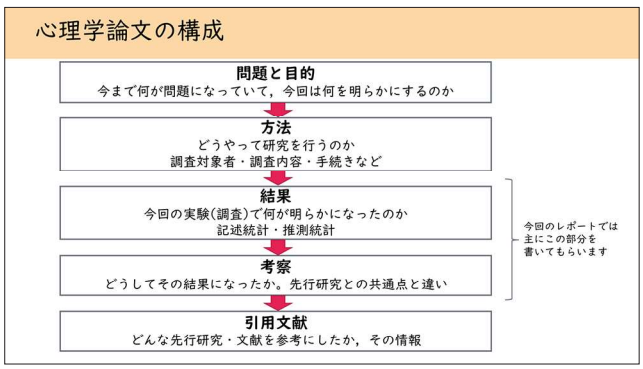
――授業構成のポイントや工夫（学生からの評価が特に高かったポイントや学生のコメントのご紹介、学生の学修意欲を向上させる取り組み等）についてお聞かせください。

授業を組み立てるうえで特に大切にしているのは、少しずつ難しくなるステップアップ方式です。この点は学生からも「段階的に理解を深めることができ、自分の成長を実感できた」という声をもらいました。

具体的にはクールを重ねるごとに段階的に難易度を上げる工夫をしています。例えば実験計画の回で論文を読む際は、Forms で内容理解を確認するクイズを作成して読み進めながら答えてもらいます。最初は着目するべき箇所にコメントを付けた論文を配布してクイズも易しめにしますが、回を重ねるごとにヒントを減らし、より高度な内容にも自力で答えられるようにしていきます。

結果分析の回でも同様に、はじめは統計用語の解説や分析手順を丁寧に説明しますが、同じ分析を繰り返すうちに最終的には学生自身の力で分析を進められる状態を目指します。レポート作成の回でも、最初は書くべき箇所や注意点を絞って提示し最終的には学生が一から論文形式のレポートを書き上げより質の高い考察を書くことができるよう導いています。

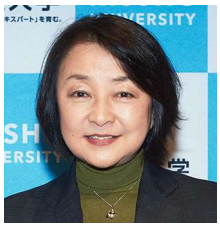




――授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

段階を踏みながら実践的に知識やスキルを深めていく授業では、全員が同じペースで理解できるわけではありません。難しくてついていけないと感じる学生もいれば、もっと自分で進めたい学生もいます。心理学実験の授業では、作業手順を細かく示したスライド資料を用意して各自のペースで理解を深めながら作業を進められるようにするとともに、こまめに様子を見て質問に対応するよう心がけています。学生からも「資料がわかりやすい」「わからなくてもすぐ聞けて助かった」といった声をもらいました。一方で課題が難しくなるにつれて不安を感じる学生や、作業を早く終えて手持ち無沙汰になる学生も見られたため、引き続き工夫を重ねたいと考えています。

――ありがとうございました。



坪田 まり子 先生
（非常勤講師）

受賞科目名：
「キャリア・デザイン入門H」
（対面）

――授業の目的や概要、授業の流れについてお聞かせください。

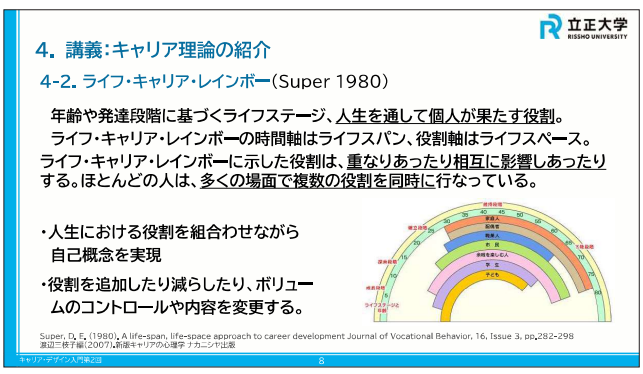
この授業では働くことの義務と喜びの両立を目指し、将来のビジョンと学生時代にやるべき具体的な行動計画の立案を目的としています。担当教員は教育開発課が作成した共通教材（動画と資料、ワークシート）を使って全授業を展開します。

まず授業の冒頭で職業選択の考え方など、各テーマに沿った理論を共通動画で学びます。次にその内容に即した自分の興味・関心や強みなどについてのワークを通して自己理解を深めます。その後グループ内での意見交換を行い、同じ学生でも人によっていろんな考えや価値観や夢があることを認識することで、将来多種多様な人たちの中で自分が働くイメージを形成することにつなげています。

――授業構成のポイントや工夫（学生からの評価が特に高かったポイントや学生のコメントのご紹介、学生の学修意欲を向上させる取り組み等）についてお聞かせください。

それほど悩むことなく個人ワークができるように、私はスライドをただ説明するのでなく趣旨に沿った具体例を適宜盛り込むことを常に意識しています。私自身の例や、私が知りうる他の学生たちの事例を積極的に紹介しています。その後グループワークに移行します。授業の中で最も大切な時間がこのグループワークだと位置づけ“グループの仲間を信じて、できるだけ自己開示をしましょう”と毎回声掛けをしています。そのためにも私が率先して必要なタイミングで自分を語ることで、他人に語ることへの抵抗感を減らす助けになればと考えています。学生たちはスムーズにグループワークに入り、毎回活発な意見交換をしてくれます。知らない人と話すことへの抵抗感を減らすために適宜その場を温めることも工夫しています。「グループワークが楽しかった」「先生がグループ分けを毎回工夫してくれるので、様々な価値観をもった学生からの話を聞けた」「先生が自分の体験を話してくれるとき、時代による職場の変化も教えてくれる。先生のリアルな歩みにもとづく話が非常に興味深かった。自分も挑戦しようという意欲につながる」「圧倒的にコミュニケーションの能力が高くなった」など彼らの笑顔が見えるようなコメントをいただきました。「一人一人がイキイキと活動していて、1限の授業とは思えない環境だった」は最大の褒め言葉で、授業出席率90%以上が36名中22名もいたことで、学生たちの頑張りに心から感謝しています。

あらためてこの授業は“自分らしく働いていくビジョン”を各自が想像し、未来に向けて勇気をもって前進するためのヒントを与えることだと確信しています。他人の話を聞くことが新たな気づきにつながります。他者と良好な意思疎通を図るための練習を適宜取り入れ、自分自身を肯定的に表現するためのサポートができたことが嬉しい結果につながったと自負しております。





――授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

個人ワークの時間が学生によって十分にとれていないことが課題です。グループワークの時間を長くとるためには個人ワークには15分程度しか時間を使えません。学生の進捗状況によっては中途半端な状態で自己開示に挑まなければならないために今後は時間配分を工夫する所存です。

グループワークの人選は同じメンバーに偏らないよう、3回目以降は席の座り方を特定しました。友達同士で組ませずに話したことのない学生に自分から声をかけて隣に座らせる工夫をしたことが功を奏しました。就職活動時で必要な“知らない相手とも良好な人間関係を築くことができる対人関係能力を高めさせる練習は今後も活かしていきます。

――ありがとうございました。

令和７（2025）年度
「授業アンケート」・「大学院学修成果・満足度調査」実施概要

授業アンケート

立正大学では、令和6年度の自己点検活動として、ディプロマ・ポリシー（以下、DP）、コア・ポリシー、アセスメントポリシーの見直しを行いました。その過程で、2000年度から実施してきた「授業改善アンケート」の質問項目を見直し、科目レベルだけでなく教育課程レベルにおける学修成果のアセスメント指標として活用できるよう、質問項目を設定しました。さらに、実施の目的や結果の活用方法が拡大したことから、呼称を「授業アンケート」変更し実施を開始しました。

教員の皆さんには、多様な授業実施手法の共有および授業内容や方法の点検・改善への活用、学生の皆さんには、授業の理解度や達成度の自己評価の確認に活用いただくことを期待しています。

実施概要

実施期間	第１期　2025年６月23日～７月５日 第２期　2025年12月１日～12月13日
対象科目	第1期は第1期科目、第2期は第2期科目および通年科目の全科目。ただし、受講者5人未満、ゼミ、卒論、学修の基礎、オムニバス科目、集中科目については、学部ごとにアンケート実施の可否を決定。
実施方法	実施期間の該当科目授業時間中に原則的に実施。スマートフォン等からWebシステム「OpenLMS」より回答。



大学院学修成果・満足度調査

立正大学大学院修士課程および大学院博士後期課程においては、2009年度から実施してきた「大学院生の教育・研究環境に関するアンケート」を廃止し、新たに「大学院学修成果・満足度調査」を設計し、大学院修士課程および博士後期課程で定めるDPに対応する評価指標として活用できるよう実施することとしました。大学院生には、自己評価や満足度の確認に活用いただくことを期待しています。

また、「大学院学修成果・満足度調査」には自由記述による質問項目を設けています。この自由記述から得られる学生の声を、教育・研究環境の改善に活用していきます。

実施概要

実施期間	2025年12月上旬～2026年３月末日まで
対象学生	修士課程および博士後期課程に在籍する大学院生
回答方法	OpenLMSより回答。

学生から寄せられた声

自由記述回答では、「講義や研究指導について満足している」「熱心で丁寧な指導を受けられた」といった声がありました。一方で、研究費の支援、Wi-Fiや図書資料等の研究環境、大学院生向けのキャリア支援について、さらなる充実を求める意見も寄せられました。

以下、寄せられた声の一部をご紹介します。

「大学院での生活では、様々な教授たちとのコミュニケーションの機会があり、とても知的刺激を得られる時間でした。」

「大学院生の事情に合わせた就職活動関係の企画の実施を望みます。」

編集後記

第35号では、令和7年度のベストクラス賞受賞の4名の先生へのインタビュー、そして、令和7年度の授業アンケートの実施概要を中心に掲載しました。受賞された先生方、ご協力誠にありがとうございます。他学部の先生方の講義について知る機会は多くない状況にあると思います。本ニュースレターを通じて、ベストクラス賞を受賞された先生方のさまざまな工夫をご覧いただき、皆様の講義に活かして、学生たちの成長につなげていただければ幸いです。

北村学長の「令和8年度立正大学FD活動について」にもあります通り、昨今の著しい生成AIへの教育の対応は、今後のFD活動の重要なテーマと考えております。FD部会としても、生成AIへの対応について、先生方への適切なタイミングで情報提供に努めて参ります。

（教育開発センターFD部会長　経済学部 准教授　慶田　昌之）

RISSHO UNIVERSITY FD News Letter Vol.35
令和8年11月1日発行
編集発行：立正大学　教育開発センター
〒141-8602　東京都品川区大崎4-2-16
MAIL：edud(at)ris.ac.jp（(at)は@に置き換えて下さい）　URL：https://www.ris.ac.jp